ISSN　2435-6824

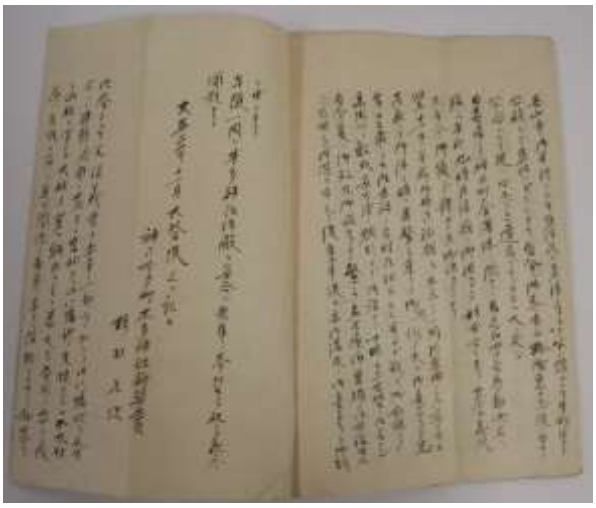
郷土資料室だより

鈴鹿市文化スポーツ部文化財課

第４号

大正２年　龍光寺で開かれた本多家遺墨展にて　中央に立つ男性が本多忠鋒（第７代神戸藩主忠貫の嫡男・子爵）

→史料紹介参照



本多神社御神体拝受ノタメ上京並ニ本多神社落成

大祭ト旧藩主御来神ニ付テ記録

この郷土資料室だよりでは、郷土資料室で保管する古文書を中心とした史資料について紹介していきます。

郷土資料室

〒513-8701　三重県鈴鹿市神戸一丁目 18-18

Tel 059-382-9031　Fax 059-382-9071

発行/鈴鹿市文化スポーツ部
文化財課

発行日/2020 年 9 月 25 日

特集　山中家文書の紹介④

今回は「山中家文書」より、様々な地方博覧会（品評会・共進会）を中心とした山中重兵衛の活躍ぶりをご紹介したいと思います。

第四回内国勧業博覧会

初出は明治二十八年、京都の岡崎公園で開催された第四回内国勧業博覧会に関する記事で、京都の北村安太郎から**「京地もいよく廿八年度内国勧業第四博覧会も相定り候テ、九月一日より七日間計、其地建築之為砂持**（川を浚った砂を運んで整地する事）**等相始り、町々夫々賑々敷次第之由」「洋人追々上京仕候由、養生之地ニハ五大洲**（アジア・アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリアの五大陸）**之冠タル趣、此程墺国ノ皇太子か京地へ御滞在ニ相成候而、嵐山夫々名所御順覧」（明治二十六年八月十八日、**No.2597**）と開催決定時の賑いと、オーストリア皇太子フランツ・フェルディナント（約一年間の世界一周見聞旅行中）の日本訪問に触れています。大正三年、大公となったフランツ・フェルディナントは、妻ゾフィーと共に軍事演習視察先のサラエボで暗殺され、これが第一次世界大戦勃発の引き金となりました。

さて、当博覧会の受賞者は**「有功一等賞牌・伊藤小左衛門同二等・柿弥十郎　山田嘉兵衛　故駒田作五郎　三等有功賞牌及ビ賞状ヲ受賞シたる者ハ大約十五名ニシテ云々、何れ後日、新聞明細ハ相送り申上候、」（明治二十八年七月十二日白子の杉崎諫より徳嶋回商中の重兵衛宛　No.2783**）とあり、先に大阪分の受賞名鑑が発行され、少々遅れて全国各府県総体の受賞名鑑が一部金三十銭で（当時の郵税＝郵送料は四銭）、大阪東区内淡路町の中興社から刊行された事が分かります（**No.2784**　七月十四日、重兵衛の問合せに回答）。

流行柄と新たな技術の開発

ところで、型紙用の地紙はまず、楮だけを原料に漉いた和紙を二～三枚、柿渋で貼り合わせ天日に干して作られます。タンニンが酸化して紙の繊維を強くするため、柿渋は必需品ですが、遂に伊勢国だけでは賄いきれなくなってしまい、形紙商・福治の北村庄之助・治兵衛（白熊ともいう）は明治八年、美濃（岐阜県）揖斐郡の柿を購入し、同地で型紙製造に適した渋を造って持ち帰りました（前出の北村安太郎は福治の京都支店を任されていました）。型紙用の渋は、粘り気・接着力がある「足の長い」渋で、水分が混じらず品質の良い渋柿とされます。その品質は最低二年経過しないと安定しません。さらに強靭で良質な地紙とするためには，五年寝かせる必要があります。そのため、治兵衛は、明治十年頃、渋紙を燻蒸して手早く枯らす「室枯らし」の方法を考案しています。

重兵衛は、大正九年四月九日、千葉県香取郡へ回商中の息子・孝三郎に**「兎角流行之変遷急激ニして、意匠の推移ニ着眼肝要ニ御座候、」（No.6543）**と注意を促していますし、明治三十八年二月二十六日、伊予大洲本町（現愛媛県大洲市）ゑみや染工場からの注文書には**「左之物品至急御送付願上候、紋紙十枚　紋書用黒直シ墨弐　最上紋書弐本　流行小紋見計ニテ十枚程、右之通ニ小包ニテ、」（No.4948）**とあるように、新流行柄を求める葉書は山中家文書の中でも枚挙にいとまがありません。今も昔も流行の柄は時間的制約を受け、企画に到底間に合わない、というジレンマを抱えていたのです。そこで誕生したのが、糸紗張り（大正十年、富山県高岡市の井波義兵衛発案・特許。型紙に絹の網を被せて漆で固定）による型紙補強法でしたが、紗張りの出現によって二枚型や糸入れの需要は激減し、伊勢型紙業界はここでもジレンマを抱えます。

様々な博覧会出品

こうして伊勢型紙受難の歴史を繙いた後に改めて「山中家文書」を見ていきますと、この時期の重兵衛の活躍が一入際立って来ます。重兵衛は、明治三十年十一月十四日付神戸出張三重県事務所よりの**「御照会之柿渋審査之結果、今回褒状下賜相成候条、」（No.69）**を皮切りに、明治三十一年五月二十一日から五日間、三重県会議場で開かれた津製造品品評会における褒賞授与（**No.72**）、同年十月十五日から宇治山田町（現伊勢市）五二会館商品陳列所で開かれた三重県製造品品評会に於ける褒賞授与（**No.75**）と、次々と功績を挙げて行きます。五二会とは、パリ万博で総領事を務め、各地を巡歴して生涯を地方在来産業の育成に捧げた「布袋の農相」前田正名が、明治二十七年に五品大会を改めたもので、織物・陶磁器・金属器・漆器・製糸器に彫刻・敷物を加えた七業者の団体組織を指します。その三重県支部として設置された五二会館は、後に全国の物産収集と委託販売を目的とする株式会社組織となり、虎尾山には東郷平八郎・伊藤博文・新渡戸稲造らが宿泊した、眺望の素晴らしい五二会ホテルがありました。（現代の虎尾山は、伊勢市出身の小説家・橋本紡『半分の月がのぼる空』の舞台として有名です）

ちなみに、褒状授与式直後に会館山上で開催される園遊会の会費は、一人につき一円と印刷されていますが（No.73）、当時、小学校教員や巡査の初任給が月八～九円でしたので、かなり高額の会費でした。

さらに翌三十二年八月十五日付で、第二回東海実業区五県連合五二会品評会にて形紙褒状一等を受賞（No.76）、同年十一月二十四日付で、会津地方物産共進会でも褒状一等（No.77）、それに先立ち十日付で、出品した三号形紙の売約済通知（No.78）が届いており、まさに昇り龍のような躍進を見せています。

山中家はがき 77

郷土資料室には葉書以外にも、第二回東海実業区五県連合五二会品評会への出品を条件に交付された、関西鉄道割引券（2―84）があります。

「汽メ車割引券、郡役所ヨリ送付越候条、及配付候也、

一　関西鉄道乗車賃ハ、往復共　弐割引

一　官設東海道駅ハ、今回配付ノ割引券ニ品評会ノ証ヲそえ、そヲ浜松駅ニ於テ往候者半減スル事、

一　出品人出品ヲ取消スモノアルトキハ、割引券ハ返却ノ事、

山中重兵衛殿　　白子町役場　　」

山中家資料 2-84

また、同年の「会津共進会関係要書」と一括された資料には、聯合郡市外出品販売手続及び通知書・開会式と褒状授与式の案内書・開会中（十一月一日～二十一日）の特別入場券、さらに**「各府県出品者ヨリ残荷未着ノ照会有之候ニ付、通運会社取調候処、岩越鉄道貨車取込ニテ漸ク本月十三日ニ不残発送致タル義ニ候、実ニ遅延ニ相成候段ハ御申訳無之次第、且該金**（売上代金）**及褒状ハ共進会事務所ヨリ不日**（近日中に）**送付可致、此段御通知仕候也、**」という十二月二十二日付回答書（2―83）などが保存されています。岩越鉄道（現ＪＲ磐越西線）とは、郡山（福島県）から新津（新潟県）を結ぶ私設鉄道で、新一万円札の顔・渋沢栄一が地元の資産家と共に私財を投じ、明治二十九年創業から同三十六年迄、取締役として経営にあたりました。

さらに博覧会の記録をみていきますと、明治三十四年九月二十四日には、内国生産品共進会審査部からも**「菓子褒状大石繁吉氏・竹口久兵衛氏・田中勘吉氏　形紙有功銀牌　山中重兵ヱ氏・北村林ノ助氏・小林喜蔵氏　ホ状杉崎七兵ヱ氏」**と、朱筆の回答書が届き（No.83）、翌三十五年一月十六日には、京都市御苑内博覧協会から伊勢形紙業組合事務所宛に**「本年第二回全国製産品博覧会ヲ開設可致候ニ付テハ、精々御出品相成度、右ハ貴県庁ヨリモ御奨励可被成下筈ニ候ヘ共、尚ホ御依頼申上候、」**（No.3995）と青焼葉書が届きます。折しも明治三十五年は、「郷土資料室だより」第3号でご紹介した白子町立工業徒弟学校（三年制夜間高校）ならびに「図案研究会」発足の年とあって、山中家と親交の深い京都市福治商店も**「陳ハ**（さて）**都合能ク四国商用も片付御上阪と遠察仕候、拙者モ去廿日上京、昨日ハ博覧会一覧仕候、中々盛会、北野天満宮万灯会モ大ニ賑、一度帰村之際御立寄待入申候、昨年之共進会銀牌**（先述No.83をご参照ください）**正ニ預り有申候、」**（No.4102　四月二十二日）と、大阪土佐堀の定宿播磨屋・津田松助方の重兵衛に、その盛況ぶりを伝えています。

山中家はがき 4102

なお、伊勢型紙業組合につきましては、『形紙の起原と沿革』（昭和四年・北村喜代次編輯発行　2―113）に**「型地紙を製造する型地紙製造部組合、彫刻をする彫刻部組合、行商**

販売を業とする地方販売部組合、仕入中継を業とする中継部組合、糸入加工を業とする中糸部組合等がある。兎も角此の五つの部分組合が集ったものを、伊勢型紙業組合と云うのである。」（※引用文は現代仮名遣いに改めた）と詳述されています。同書には「伊勢型紙組合創立（明治三十年）以来之組合長」として、山中重兵衛をはじめ、寺尾斎兵衛（白子屈指の型紙問屋。寄贈を受けた寺尾家住宅は鈴鹿市指定文化財、平成九年に伊勢型紙資料館としてオープン）や、後述の第五回内国勧業博覧会で斎兵衛と共に型紙出品列委員を務めた南部廣治等が、顔写真付で掲載されています。

山中家資料 2-113

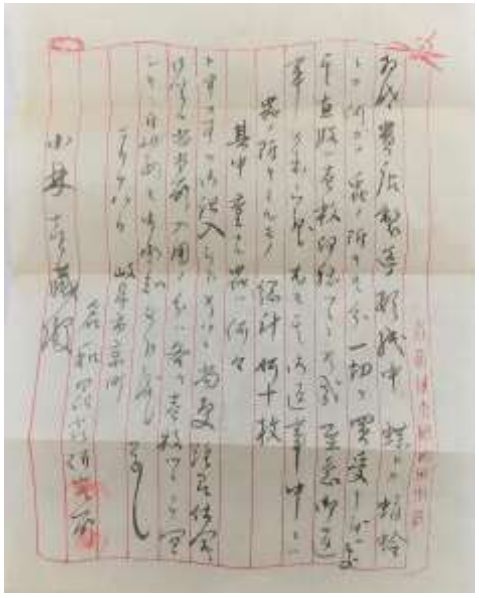
図案研究会についても、「**会員研究製作の図案を東京に送り染色界の大家の会合を煩わして批判を受け其の結果を製作者に伝え、優秀なる作品に対してはこれを賞するなど奨励研究に努め終には各地に会員自ら指導員となって出張する等目ざましき活動を為し斯業に貢献する処尠少ではなかった。**」という記事を、明治三十九年七月二十二日、福治東京支店からの葉書「**今般の白子町図案会モ誠に御盛会ニて二百十六通有之候由、元番三十号分一等賞ノ由、一度乍恐一等ゟ十等迄、メ五十人分御知らせ被下度候、大ニ又参考ニ可成候点モ有之候と心得候、友仙下ヱは審査外ノ由也、**」（No.５２６３）が、正に裏付けています。

博物館への寄贈

重兵衛は、この時期に博物館等へ型紙の寄贈も数回行っています。明治三十二年創立の香川県博物館（高松市・栗林公園内にある現商工奨励館）に、重兵衛が形紙二組を寄贈した事に対する八月五日付の挨拶状（２―８５）が残されています。明治三十四年一月には、四日市市開設の北勢物産品評会に出品した友仙形紙二面（額面入）を、閉場後、宇治山田町神苑会農業館（明治二十四年、伊勢神宮外宮前に創設された日本最古の産業博物館）附属工芸館に寄贈して欲しいと切望され（No.７９）、二月十六日付で礼状（No.８０）、三月二十日付で承認状（２―８６）が送られています。

また同年二月十八日、小林喜蔵殿　帳場御中宛に岐阜市京町の名和昆虫研究所（現在は岐阜公園に移転）より「**拝啓、貴店製造ノ形紙中、蝶トカ蜻蛉トカ何ガナ蟲ノ附キ候分、一切ヲ買受申度候処、其直段ハ壱枚何程ツヽニ候哉、至急御返事被成下度候、尤モ其御返事中ニハ蟲ノ附キタルモノ総計何十枚　其中重ナル蟲ハ何々ト申ス事ヲ御記入被下候ハヽ、尚更難有仕合ニ御座候、尚当所入用ノ分ハ各々壱枚ツヽニテ宜シキニ付、此段々御承知被下度候、草々**」と、封筒と封緘印は蝶、用紙はトンボを印刷した依頼状が届きます（封５３９）。さらに翌月二十三日、山中家から寄贈された形紙を四月中旬開催の全国昆虫展覧会に参考品として陳列したい、と葉書が届きます（No.８１）。

山中家に寄せられた型紙注文を見ますと、「**ハデ**」な形、**水ニ鯉とか蝶ニぼたんとか云ふ様品**」（No.５４３５　大正十年五月七日　高知県長岡郡岡豊村中島・紺屋笹岡基馬より）のように蝶の図案が人気を占めていますが、他にもミツバチ・てんとう虫・カマキリ・蛍・鈴虫・アメンボ等々多種多様な昆虫が型紙図案に用いられますので、さぞかし興味深い展覧会だった事でしょう。



山中家封書 539

第五回内国勧業博覧会

さて、重兵衛の弟喜蔵が亡くなった明治三十六年開催の第五回内国勧業博覧会についてみていきましょう。

日本で初めて内国勧業博覧会が開催されたのは、明治十年東京での事でした。この時は、明治十四年開催の第二回内国博覧会と同様、出品そのものが評価され、形紙出品者五十七名は全員鳳紋賞牌を受け、明治十一年の三重県内物産博覧会で褒状を受けました。ところが、第三回からは製品そのもの（価格や需要等）が細かく審査されるようになり、第五回目はさらに、輸出奨励や地域振興に貢献出来る製品か、という点で審査がなされました。（赤羽光『第五回内国勧業博覧会

紀念染織鑑』と第五回内国博審査に関する一論考」）

「郷土資料室だより」第3号P6でご紹介しました葉書の他にも、杉崎七兵衛は、**「下拙も先便一寸申上候通り、過日西京**（京都）**仕入ニ出向序ニ、博覧会ノミ一覧致シ参り候、今回出品ノ伊勢形紙ハ容器ノ侭陳列致呉候ハヽ、実ニ見ルヘキ産物ニ御座候所、甚タ残念ノ次第ニ御座候、今回東京出品ハ手本摺もナキ間、甚タ見苦キ体裁、いせ出品ハ巻形陳列ニテモ相応ニ見受参り候、今回ノ出品件ニ付テハ、三重県庁ノ不都合ハ実ニ責ムヘキ件々有之候、過日審査ノ際（最）中品ヲ巻ト云事ハ、大井ニ不申合ナル事ニ評シ有之候様伝聞致シ、」**（No.4588　**明治三十六年四月二十八日**）と紙面に書き切れない程、憤懣やるかたない思いを書き送っています。これは正に、翌年出された報告員審査官・竹下直次郎の**「三重県　本県ノ出品ハ最モ多数ニシテ、多クハ巻束シアルヲ以テ是亦タ其模様ヲ見別スルニ不便アルノミナラス、之カタメ実際使用スルニ適当ナラサルモノアリ」**との講評を裏付けています。

さらに、同年七月二日付で福治が出した葉書（No.4665）や受賞名鑑・受賞人名録から、福治東京支店の北村林之助が二等賞、長谷川庄兵衛（東京）・南部定助と六谷芳蔵（白子）が三等賞、寺尾斎兵衛・笠木良右衛門・寺村重右衛門・南部廣治・細谷宇吉・南部米吉（糸入れの発案者・型地紙）・半根岩松（駒箆）が褒状を授与された事が分ります。（駒箆とは、型紙に均一な力で糊を付けて柄をつないでいくための道具で、その糊が布の繊維に浸み込んで染料に染まるのを防ぎます。すなわち、白く見える無数の穴がそのまま白い紋様となるのですが、着物一反につき五十から九十回も糊ベラでこすられる伊勢型紙は、百反の染めにも耐えられるほど強靭だと言われています（西山妙『紋様の賦』）。）

第五回内国勧業博覧会審査補助荻原國三も、白子の形紙について**「小紋形ノ道具彫ト云フ細微ノ物ニ至リテハ、未タ決シテ他方ノ企及スヘカラサルナリ」**と、この精技が衰潮、枯凋しつつある事を大変惜しんでいますが、重兵衛は大正期も半根岩松に箆を注文しており、**「先便ニ申上候、半根岩松ノ品ハ取ヨセ置被下候、」（No.I209　大正三年五月四日　高松市回商中の孝三郎から重兵衛へ）・「半根ハ普請中怪我致シ、身体ノ不自由ニテ製品不可能ニ有之、」（No.I973　大正四年七月二日　重兵衛から松山市回商中の孝三郎へ）**といった葉書が見られます。

また、内国博覧会閉会後の多忙さは、白子の福治本店より徳島回商中の重兵衛宛に**「博覧会戻り形ハ悉皆―小（小林）―杉（杉崎）―重（重兵衛）―共請取預り置候、枠ハ郡役所ヨリ持帰り、もじやヨリ（十文字屋）杉七迄届方頼候、ガラス一枚モなし、東京モ本年ハ相応之景況、地白類（じしろ）（模様以外の地色を白く残して染めたもの）沢山注文参り候、仕入方高印割合ニ売先安価、引合兼候、乍併（しかしながら）、注文沢山アレバ上等喜入候、勢地職エモ現今随分急敷、徒弟も急敷学校登校者少シ先、三十人位之事、渋ハ今ニミノヨリ着舟なし、何レミノ出荷冬分ニ相成候、」（No.4744　明治三十六年十月九日）**と書かれている通りです。重兵衛も多忙を極め、九日午前七時、本状と入れ違いに徳島市西横町泊屋を発ってしまい、徳島県美馬郡脇町平田久太郎方も十一日午前八時に出発、西横町泊屋へ戻って来たため、この葉書は二度も転送され、四枚の附箋付で、十四日漸く重兵衛の手に渡りました。

第九回関西府県聯合共進会

次の大規模博覧会は、明治四十年に三重県主催で開催された第九回関西府県聯合共進会です。**「来る四月一日より五月卅日まて県下津市に於て関西二府廿県聯合共進会開催相成候間、神宮参拝旁御来観被成下度奉待上候、」（No.5342　高知県香美郡立田（たてだ）村字本村・杉本龍吉宛）**と、重兵衛の年賀状にも気合が入っています。

更に、現在目録作成中の「山中家文書」封書No.I77には、同年一月二十八日、先述の白子町立工業徒弟学校教諭兼校長の牛窪亀五郎が重兵衛に、**「扨本年四月、津市ニ於て開催可相成聯合共進会へ、為参考当校より元禄以来之塑紙を出品してその沿革の一斑を知らしめ、併せて広く世人に斯業応用の道を紹介し、将来益々発展之策を講し度候間、漸意のある処御賛襄ありて、何かと是れが材料蒐集に御尽力被成下候様奉悃願候也、」**と協力を求める手紙が残されています。

三月八日、東京福治の北村林之助は**「誠に尊兄ニは御面倒ニは候が、当方ニは大々極々上都合、」**と重兵衛に博覧会解説書を依頼（No.5416）、閉会前の五月二十四日、福島回商中の杉崎七兵衛は**「共進会も本月限り閉会ノ由、東京ハ八月迄延期トノ風説ヲ聞及候、町長ノ取計ニテ下拙も共賛会特別会員ニ付、開会・閉会ニモ招タイヲ受クヘキ都合、閉会ノ節ハ貴君代リニ御出向被下候、」**と閉会式代行を依頼しており、重兵衛の人柄が窺えます（No.5440）。

審査結果については七月十四日、やはり東京福治の北村林之助が、**「博覧会ハ寺村様ニ等賞、寺尾・神崎・福治三等賞、貫七褒状也、東京ハ此四軒ダケ出品ノ事、白子尾崎一軒出品ニ相成居候、受賞なし、外委細ハ受賞人名録送り升、」（No.5**

463）と書き送っていますが、同年七月六日の官報第七千二百五号附録○産業には、**「第九回関西府県聯合共進会受賞人名　本年五月二十日三重県主催第九回関西府県聯合共進会ニ於テ褒状授与式ヲ挙行セリ、其受賞者ノ氏名左ノ如シ（農商務省）**」として、**「寺尾完吉（意匠登録品　染形紙）**」と記載されています。

この博覧会の来場者は二ヶ月で七十七万九千五百六十六人にのぼり、終了後は三重県勧業陳列館として、県下生産品や県外参考品の委託販売も手掛けました。また、「共進会全景」中央の参考館があった所に県立博物館が建てられました（現在は移転）。

大典記念京都博覧会

明治四十五年七月三十日に明治天皇は持病の糖尿病が悪化し、還暦を目前に崩御、一般の葬儀にあたる「大喪の儀」は九月十三日に執り行われました。そのため、翌大正二年はほぼ全ての人達が、二年後の大正四年にも「郷土資料室だより」第2号でご紹介した田金匡夫他数人が、**「諒闇中に付」**と新年の祝詞を控えています。そして、大正四年十一月十日に大正天皇即位礼が京都御所執り行われました。

「今秋我京都に於て、畏くも今上陛下（大正天皇）**の御即位式挙行せらるゝ事と相成り、其の期日も追々接迫致し候に付いては、此の千載一遇の御盛典を紀念として博覧会なり、尚又、種々の珍らしき事物も設立仕り賑々はしく候間、其節には誠に見苦しき宅にて何の風情も無之候へ共、御拝観かたぐ御遊覧の為御光来相成度、鶴首してお待ち申居候、」**（No.1991　**大正四年十月十日**）と、京都市下京区錦小路通堀川西入で絵具染料を商う建部商店が招待状を認めているように、同年十月一日から十二月十九日迄、岡崎公園を中心に、大典記念京都博覧会が催されました。No.1481は十一月十四日付で長野県下伊那郡旦開村の植村経治郎が出した**奉祝御大典葉書「即位礼紫宸殿御式場之図」**です。なお、皇室関係の珍しい葉書としては、明治三十八年（日露戦争）**戦勝紀念「各宮妃殿下繃帯御調製」写真付絵葉書（京都・北村安太郎の年賀状**No.349）が挙げられます。

山中家はがき 1481

山中家はがき 349

重兵衛の同業者の杉崎七兵衛の後継者・正造もまた、父親同様大変筆まめな人物ですが、**「今上陛下の御大典を奉祝候、当隊に於ても去十日午後二時半、御真影奉戴式ニ次イデ、聖上陛下京都にて行はせらるゝ御即位御大礼の遥拝式、営庭**（兵営内の広場）**にていとも尊く、三時半万歳を三唱し、工兵隊にては祝砲を発砲し市内はそれぐ奉祝にて大賑わにて候、三時半を期しての打揚げる六千万臣民の熱誠極まる万歳の声は、北は雪深き樺太の極より南は椰子茂る南洋島新古領地までの喜の声は、実に天地も震動する許りにて、誠ニ目出度限りにて御座候、」（十一月十二日　No.1476）**と奉祝御大典日の様子を具体的に記しています。この時、正造は三年の満期除隊を控え、二十五日午後一時半白子駅到着予定と伝えていますので、喜びに一段と拍車がかかった事でしょう。

また、正造は、大正元年十二月に出郷した際も、重兵衛に見送りの礼と豊橋騎兵第二十六聯隊第五中隊第一班に編入の報告をし（**十二月一日　**No.922）、さらに**「去一日小生入営仕、乗馬決定に相成、陸中**（岩手県大部分と秋田県の一部）**産花海身長五尺壱寸**（約百五十三㎝）**、気質活発にて誠に良馬にて候得共、**（中略）**去二日より乗馬教練、飛乗ノケイコヲ教わり居候、小生ハ班十名ノ新兵の内身長ハ九人目にて、一番高き乗馬の為飛乗ニ閉口仕居候、起床ハ五時半、日朝点呼五時五十分、其レヨリ馬の手入一時間、朝飯ハ七時半、午后四時より一時間馬の手入仕夕食五時半、夜ハ班にて学科を教わり、クツ磨キ、八時日夕点呼、其レヨリ馬の手入、三十分位入浴、八時五十分就床、九時消灯に御座候、ナカく新兵ハ此頃ハ日一日とヱライ、第一馬ノキタナキ手入に閉口御座候、然し此頃ハ、大分軍隊世活に馴れ愉快に暮し居候、歩兵より騎兵ハ倍の骨入と地方にて聞及候通ニ御座候、」**（No.934）

と、軍務精勤の様子をユーモラスに書き送っています。

重兵衛もまた、松山市を回商中の孝三郎宛に、**「当季ハいつ迄も温暖なる事ニて、凌き易き年柄ニ在之、当町（白子）も来る十日ヨリ十八日迄ハ、大字氏子々ニて大大奉祝の計画も在之、興行の催しも種々打合居候間、一周間ハ休業の事ニ相成可申候、」（大正四年十一月六日　No.1466）**と町の賑いを知らせています。

京都市の福治本店出張所（大正四年七月、六角通新シ町より猪熊通錦小路上ル東側に移転）・北村捨次郎も十一月九日、**「就テハ目出度キ御大典モ当市ニ於テ上サセラレ、帝国ノ高位高官ノ御方々モ御集リト相成、市民各自ノ催シモ有之テ、一層賑ハシク、去ル七日ノ御着、烏丸通リヲ御所へ向ワセ給フ通御ノ節、一般奉迎ノ有様ハ新聞紙ニテ御承知ト奉存候、私モ奉迎申候、御大典後ハ一般ニ御所拝観御許シノ由、致見物旁皆々様御揃ニテ御上京被下度、待チ乃申候也、」（No.1471）**と、即位礼のため御所へ向かう大正天皇奉迎の様子を手に取るように伝えています。

同氏はまた、翌大正五年、即位礼に用いられた高御座（京都御所紫宸殿に常設されている天皇の玉座）の写真付年賀状（No.1586）を送っています。

山中家はがき 1586

（渡邊潤子）

史料紹介

本多神社御神体拝受ノタメ上京並ニ本多神社落成大祭ト旧藩主御来神ニ付テ記録

神戸旧藩祖本多忠統公を祀ル本多神社新築委員ヲ旧藩士集合ニヨリテ選定セシハ明治四十一年一月四日夜ナリキ　其名左ノ如シ

委員長　西尾壽繁　委員　須崎保慶　〃　片岡次郎吉
〃　戸門正誼　〃　堀秀次郎　〃　高橋光次　〃　杉村七次　其他　西村政次郎ハ他ヘ転居シ中錦是鑑東坂友次ハ中途ニシテ死亡ス

右の委員選定セラレ其後五拾百九回ノ委員会ヲ開キ寄附金募集ヲ手始メトシテ旧氏神八幡社ヲ本多神社ヘ合祀ノ出願ヨリ旧城跡天守台掃除ノ手順ヲナシ数十回ノ本多町総出ヲナシテ遂ニ荘厳ナ社殿ヲ建築シ或ハ道路ヲ開ノニ敷地買入二種々ノ苦情ヲ生ジ或ハ字住民ノ総出ノ小言ヲ耳ニシ然モ委員一同ハ此大事成動ヲ見ズンバ如何ナル苦情アルモ如何ナル困難ニ遭フモ忍ブベキノ誓ヲナシ寝食ヲ忘レテ尽力シ茲ニ明治四十五年秋季ヲ期シテ大典ヲ挙ゲントセリ　然ル偶然トヤ云ハン時ノ今上明治天皇ノ御大喪ニ接シ一ヶ年ノ延期ヲナシ改暦大正二年十一月九日ヲ以テ此ノ大祭ヲ挙ゲルノ佳辰ヲ得タリ

是ヨリ先大正二年十月委員会ノ決議ニヨリ戸門正〇杉村七次ノ両人使者トシテ旧藩祖ノ御神霊ヲ本多子爵殿ヨリ拝受ノタメ上京スルノ重任ヲ受ケタリ

コレゾ我杉村家ニ取リテハ祖先ト子孫ニ対シテノ大名誉ト勇ミテ十月廿六日未明出発同日午後九時十五分東京着セリ

此時出迎ヒクレタル小菅叔母ニ伴ハレテ日本橋区青物町二六ナル小菅篤信方ニ宿ル

翌廿七日ハ旧藩士ナル当時有名ナ弁士鈴木充美氏ヲ尋ヒ種々ノ打合ヲナシ午後二時鈴木氏及国松齢太郎氏ノ案内ニヨリテ本多子爵様ニ伺ヒタリ　時に御上様ニハ奥様若様御三方御揃ニテ御出被下茶菓ヲ賜リ長時間種々御話シ右之御来神ニツキテノコト御神体拝受ノコトトモ御打合ヲ終リ午後五時ヨリ酒肴ヲ賜ハル（上京日記ニアリ）同日ハ午後十時小菅方ニ帰レリ　翌廿八日ハ終日旧藩士ノ方々ヘ神社寄附ノ件ニ付東奔西走セリ　翌廿九日ハ名所見物シ午後ハ凡ソノ準備ヲナシテ六時本多様家扶タル湯原鶴太郎宅ニ至リ後本多邸ニ伺候シテ午後八時ヲ報スルヤ御三方御揃ニテ御神体ノ御授典アリタリ　此時間同行セシハ国松齢太郎小菅才吉氏ナリ　子爵様御手ヨリ自分ニ拝受シ直々御玄関マテ御送リ有之　午後九時新橋発ノ急行列車ニテ帰途ニツキ三十一日天長節吉辰ノ早朝名古屋ニ着ス　兼テ河原田駅着ハ午後三時五分ト定メ数多ノ出迎人アルタメ名古屋ニテ天長節ノ観兵式ヲ見物シ午後一時四十分発ニテ三時五分河原田駅ニ着シ旧士族及神戸町民ノ出迎ヲ受ケテ午後八時無事二神社ヘ奉祀セリ

明テ十一月七日ニハ本多公ニハ河原田駅御通過大廟御参拝二付委員一同ハ同駅ニ御見立申上ゲ西尾氏ハ山田ヘ御供致シタリ　其他ヘハ種々御物語リアリテ発車セリ　翌八日ハ午後二時十二分着ニテ御出神ニ付委員及祭典掛ハ拾数輌ノ腕車（人力車のこと）ヲ連ネテ御迎ヒヲナシ其他ノ人々ハ河原田駅ノ狭キマデ御迎ヒセリ

御召ノ汽車着スハヤ自分ハ一等室ノ戸ヲ開キテ敬礼ヲナシ子爵閣下ヲ御案内申シ上ゲ改札門ヲ出ズルヤ西側ニ出迎人ノ整列礼ヲナス間ヲ上様ト通行シツツ御言葉アリ今日ハ好イ天気ニナリマシタネ　自分申上ル二昨日生憎雨天デアリマシタガ山田ヘ御着ノ頃ハ晴レマシタエアロウト思ヒマシタガ如何ト申上ゲタリ　御上ノ曰ク一時ハ晴レマシタガ又内宮様ヘ参拝ノ頃ニハ大分降リマシタヨト時ニ花長ノ前ニ至レリ同家ノ座敷二席ヲ設ケテ暫時御休ミヲ願ヒ直ニ腕車ヲ連ネテ神戸ニ向フ学校生徒其他出迎ノ人々雲霧ノ如シ

神戸町ノ入口ニ至レバ祝砲タル煙大轟キ町内ニ入レバ出発ノ御紋旗ヲ無数ニ道路ノ上ニ千鳥ニ掲ゲ国旗球燈ヲ以テ歓迎ノ意ヲ表セリ

御旅館ト定メタル竪町酒造家杉本清吉方ヘ御着第一ニ旧藩士二次二町惣代十六名二次二神官僧侶等ヘモ御拝閲アリ

杉本氏家族ヘハ殊ニ御居間ニテ拝閲アリ　兼テ待リ居タル小菅篤信氏ハ少シク中座ノ気味アレバ自分案内シテ御居間ニテ御拝閲ヲ願ヒ爰ニ自分等モ御暇ヲ乞ヒテ帰宅セリ

翌九日大挙ノコトトテ早天ヨリ御迎ヒ申上ゲ天守台ノ玉虹亭ヲ御休憩所ニ宛テ午前十時祭典ノ式場ニ御臨ミアリタリ

（式場図　略）

式終リシハ午後一時位ナリ　御上ニハ直ニ天守台上ニ松ノ御手植アリ　左ノ杉ノ所手植アリ後拝殿ヨリ角力ヲ御覧

此時一般ノ来賓ヘハ丁寧ナル折詰ヲ渡シ祝杯ヲ挙ク其数百九十有余　角力アリ煙火ノ連発アリ見物人ハ広キ天守台ニ満チテ甚混雑筆紙ニ尽シ難シ　実ニ神戸立始ニヨリノ盛大未曽有ノ賑ナリ　其夕刻ヨリハ本多公ヨリ賜ル預定アレバ之ヲ夜会トナシ　中央ニ大篝火ヲ焚キ百数十名ノ招待者ハ其周囲ニ座シテ愉快ニ酒肴ヲ戴キ午後九時頃開散ナリ　御上ノ御満足一方ナラザリキ

御旅館ヘ御帰リノ御供ヲ申上ゲシニ御満悦ノ余リ今カラ無礼講ニテ一杯ヤロウトノ所意ニテ十一時過ギマデ御接待申上ゲタリ　御酒宴中時雨蛤及長餅ノ御注文アリソレゾレ申付ケ其夜ハ本多神社拝殿ニ戻リ他ノ委員二名ト宿リ番ヲナス

当日角力ノ半ヨリ俄ニ御思立アリテ澤山及南山ニ御越アリタリ

十日ハ午前九時ヨリ龍光寺ニ開ケル本多家御代々御遺墨及御遺物展覧会ヲ御覧　神舘神社ヘ御参拝　十時ヨリ観音寺ニテ御仏事ヲ営マレ旧藩士一同ト共ニ撮影ヲナシ幼稚園児童ノ遊戯ヲ御覧　午後ハ神戸学校ノ生徒運動会ヲ御覧アリ兼テ本多公ノ御覧アルヲ聞キ居レバ近在ノ人々ハ午前中ヨリ町ノ中ハ申スマデモナク学校内ハ立錐ノ全地ナキマデニ集合セリ　行内ニハ貴賓室ヲ設アリ　是ニテ凡二時間全種々ノ運動ヲ御覧アリテ午後三時過ギヨリ山辺村ナル山辺赤人ノ碑及先代忠貫公ノ建立ナルヲ御参拝ノタメ御出掛ケニナリタリ　此時ハ鳥羽重固ト杉村七次ノ両名御供セリ

然ル二本年ハ九月四日ノ出水ニテ鈴鹿川堤防ハ切レ橋ハ流レ木田橋ノ如キモ僅二人ノ往来スルノミナル　仮橋ナリシカド御上ノミ車ニテ御供人ハ歩行ニテ橋ヲ越エ時二山辺村ヨリ村長区長ヲ始メトシテ御出迎ノモノアリ　之ニ案内セルトテ木田村ヲ通リ碑ノ前二至ル　周囲ニハ幕ヲ張リテ村民ハ一同其山麓ニ土下座ヲナシ公ヲ迎ヘタリ　爰ニテモ亦撮影ヲナス　其ノ山中御歩行ノトキ鳥羽氏ハ老体ノコトブトテ公ニ後ルヽコト半町斗リ　公顧テ鳥羽ハドーシタカ自分ハ御答申シ路険悪ナレバ後レ申セリ　公ノ曰ヘラレ足ハロホドニハ達者デナイカネト大二笑ハル

日暮帰リテ神戸町金沢楼ニ開カレシ有志百四十余名ノ歓迎会ヘ臨マル　午後九時御帰舘ノ御供ヲナシテ杉本方ニ至リ小谷正義氏及自分ハ御寝マデ種々ノ御物語ヲナシタリ

翌十一日ハ午前九時御旅館御出立ニテ一同河原田ニテ御送リ申ス　花長ニテ御休之時ニ弟繁之来リテ御前ニ伺フ　大二御喜ビアリテ先年十三歳ノトキ御出神ノ当時御相手セシ事ナド能く御記憶ニテ高岡川ノ鮎取長太浦ノ網引ナドノ御話アリ　十字十二分発ニ御座ナレバ自分ハ爰ニ御礼及御暇乞ヲナシ繁之ハ名古屋乗換ノ御世話申上ルノ目的ニテ御供ヲ申上ゲ後乗車後モ亦満足ノ御喜アリテ御別レ申シタリ

午後一同ハ本多神社拝殿ニ集合シ無事ニ挙行セシヲ祝シテ夜二入リ開散セリ

大正二年十一月大祭後之ヲ記ス

神戸本多町本多神社新築委員

杉村七次

（後略）

解説　本多神社（祭祀は神戸藩祖・本多忠統）の社殿が新築され、旧藩士・杉村七次が上京して本多忠鋒（第七代神戸藩主忠貫の嫡男・子爵）の邸宅を訪れ、御神体を分祀して拝受した経緯と、大正二年十一月に忠鋒を招いて行われた社殿新築の式典についての記録です。大正時代になっても旧藩時代の結びつきが強く残されていて、旧藩士たちは旧藩主に特別な思いを抱いていたことがわかります。

式典では忠鋒による天守台への松の手植えが行われ、その後、角力や花火が開催されました。翌日、忠鋒は、龍光寺での旧藩主遺墨展を見学し、観音寺での仏事に参加、神戸小学校での運動会を見学した後、山辺の御井跡に先代忠貫が建立した碑を訪れ、夜は歓迎会と盛りだくさんの一日を過ごしたようです。神戸町を挙げての歓迎の様子が伝わってきます。近代を迎えても、藩主を領地に迎える気持ちは、江戸時代とさほど変わらなかったようです。

（代田美里）

展覧会のお知らせ

★大黒屋光太夫記念館　開館 15 周年記念特別展

「大黒屋光太夫と『風雲児たち』」

会期：9 月 30 日（水）～11 月 23 日（月・祝）

みなもと太郎氏原作の漫画『風雲児たち』の原画と館蔵資料で大黒屋光太夫の生涯を紹介します。

★伊勢型紙資料館　新蔵企画展

「山中家文書の世界」

会期：開催中～令和 3 年 1 月 17 日（日）

7000 点以上にわたる山中家文書の中から近代の型紙関係資料を中心に展示しています。